

介護の質を高める人材育成をめざして⑤

サービスの軌跡を多くの目で 検証していくことが成長を促す

株式会社ウエルビー コンサルタント 中尾 元信

「イン・フィル」が高品質な
を維持する理由

「介護の質を高める人材育成を
めざして」も5回目を迎えました。
今回は少し趣を変えて……。
筆者は元旦に放映されるウイ
ン・フィルのニューイヤークンサ
ートをみるのが新年の最高の楽し
みです。これはヨハン・シュトラ
ウスを中心とするウイーン音楽が
好きだということもありますが、
ウイーン・フィルの生演奏をみる
ことができることも大きな魅力だ
からです。

インド出身の指揮者メータが振
つた今年のニューイヤークンサ
ートを見たある高齢者施設の施設長
が、「今年の目標は、あの指揮者
のように思うままに職員を采配す
ること！」と言われたとのこと、
他のオーケストラならばいざ知ら
ず、ウイーン・フィルに限っては
これは大きな「勘違い」です。
このオーケストラは、あのカラ
ヤンですら彼の思うままに指揮す
ることができなかった楽団です。
たとえばベートーヴェンなりモー
ツァルトの交響曲を凡庸なありき
たりの指揮しかできない指揮者が
振ると、第一楽章はその指揮者の

「作り」を連綿と伝え、
いく伝統

恒例のニューイヤークンサート
といえば、全世界で何億という人
が衛星生中継で鑑賞するという演
奏者にとってはまさに「晴れの舞
台」です。

花で飾られた会場にオーケスト
ラが登場し、それぞれの席に座つ
た場面をみて驚くのは、ヴァイオ
リンや、フルート等、それぞれの
楽器のトップが首席奏者の席に座
りますが、その隣の次席奏者が座
る席には、入団して数年、もしく
はまったくの新人が座って演奏し
ていることが結構あることです。

を定期的開催していくような試
みが必要ではないでしょうか。

なぜなら、「伝えていく」とい
うことによって、自分の実践して
いることを整理してみたい必要
が生じるからです。また、それは、
介護者と利用者という関係で終
始、完結していたものを第三者が
「みる」ことにもなります。

確かに「介護」は、提供時には
消滅してしましますが、それがど
のようにして、どのような考えで
行われたのかという軌跡を多くの
目で検証していく、多くの見方や
意見、批判を受けることが成長を
促していくからです。また、そこ
で大事なことは、事業者がその実
践報告を受け止めながら、事業者
として、「大事だと考えるもの」を
適宜伝えていくことです。そこか
ら、「なぜそのように介護するの
か」といった点を組織として共有
できる可能性もあるからです。

「技術も
所から地域社会へ

以上のことが定着したら、法人
の役員、家族、地域の方々への発
表の場として進化させるプロセス
があってもよいでしょう。事業所
の有り様や方針、介護の現場を理

「イン・フィル」が行っていることを
伝える場面設定を

ひるがえって「介護」を考えて
みましょう。

しているからに他ならないのでは
ないでしょうか。
本質的なものの一つに、「なぜ
そのように演奏するのか、音を作
るのか」ということがあるのは確
かでしょう。それがウイーン・フ
イルの伝統である「音作り」の根
幹だからです。

介護も音楽も、提供されたらそ
の場で消費されてしまう（消滅し
てしまう）ものです。それぞれの
事業所で「なぜそのように介護す
るのか」ということに対する各事
業所自身のオリジナルな答え、伝
えていくべきこと（それは事業所
の基本的な考えがベースとなるの
が当然でしょう）があるのでは
しょうか、あつたのでしょうか。多
数の場合、介護者と利用者との
消費と人間関係だけで終わってし
まっていたというのが実感ではな
いでしょうか。

「介護の質を高める人材育成」
には、職員側だけの資質の高度化
というよりも、事業者側が「介護」
をどれだけ、どのように考えて提

これはニューイヤークンサートに
限らず、彼らの本番である定期演
奏会でも、ザルツブルグで行われ
る有名な音楽祭のコンサートでも
みられる風景です。

ここでみられる風景は、新人な
り経験の少ない団員に場数を踏ま
せるという意味だけでしょうか。
彼らの演奏風景をみると、
それだけではないと思います。
「音楽を奏する」という行為のな
かにある彼らの「音の作り」を、
本番の演奏会という実践を通して
「伝えていく、教えていく」こと
を、彼ら自身が「使命」として考
え、実践している表れと思われま
す。それが先輩から後輩へ連綿と
続けられて「無言の伝統」として
根づいているのでしょう。

彼ら団員の経歴紹介をみると、
多くの現役の団員が演奏会その他に
音楽学校の教師を務めて弟子を育
成したり、数多くの音楽的プロジ
ェクトや学際研究に参加して演奏
したり、指導したり、教えたりし
ています。それは自らが「伝えら
れたり、培ったりしてきた大事な
もの」を伝えていくことで、団員
自身もその組織体であるオーケス
トラも「大事にしているもの」を
維持し、成長させていくことがで
きるということ、無意識に自覚

解してもらおう非常によい機会で
す。

もちろん、個人情報はいささか
と守らなければなりません。介
護者と利用者との関わりを、社会
という、より広い場面で検証して
いく、伝えていくことが、職員の
社会性を育てる点からも必要では
ないでしょうか。

さらにいえば、事業所や職員が
培った介護技術を事業所だけのも
のとするだけではなく、事業所が
地域の社会に貢献していく観点か
ら、「介護体験をしてみませんか」
と地域の住民に呼びかけて「介護
学習の機会」を設け、職員を講師
にしていくのも一つの方法ではな
いでしょうか。

職員も他人に教えることで自分
の介護を考えたり、点検したりす
る必要が生じますし、地域の方が
介護者の予備軍として参加してく
れる可能性だってないわけではあ
りませんから。

事業所が地域とどう結びついて
いくのか、お祭りや場所の提供も
結構なのですが、その事業所がも
っている介護の技術や方法を地域
の人たちに「伝えていく」ことで
地域の方々も職員にも「介護」へ
の認識が深まるのではないでしょ
うか。